

本旅崎長

Nagasaki Tabibon

魏志倭人伝・万葉集
遣唐使

蒙古襲来・和蘭貿易



日本の歴史は長崎の海で動いた

5episodes

長崎旅本

Nagasaki Tabibon

日本の歴史は長崎の海で動いた 5episodes

誰もが知っている歴史的な出来事を背景に、5つの物語(エピソード)が綴られています。読んでみると、ふと歴史の舞台に舞い降りたような気持ちになるでしょう。主人公はあなたです。さあ、長崎の島へ、旅に出ましょう。

episode 1
2 魏の使者が見た一支国
魏志倭人伝に記された島

コラム海の道 1 文+本馬貞夫

5 壱岐にはモグラがない、対馬にはタヌキがない。

episode 2
6 防人たちの歌
万葉集に残る防人の想い

コラム海の道 2 文+本馬貞夫

9 外交官「雨森芳洲」

episode 3
10 風待ちの島
大陸をめざす遣唐使

12 [Intermission]
島には不思議な力が満ちている。

episode 4
14 神風が吹いた島
蒙古襲来の舞台

コラム海の道 3

17 牛のマークの鯨組

episode 5
18 フイランドのオランダ商館
ヨーロッパに最初に開かれた港

コラム海の道 4

21 海の道は祈りの道

22 年表
24 交通アクセス

日本で最も島の数が多い長崎県。日本地図では西の果てになりますが、東アジア世界では、その真ん中に位置しています。昔から日本と大陸を結ぶ「海の道」にある長崎県の島々は、アジアの息遣いを敏感に感じてきました。魏志倭人伝、万葉集、遣唐使、元寇、南蛮・和蘭貿易…、「世界の中の日本」の歴史を学ぶとき、

長崎の島々を外して語ることはできません。

この本には、長崎県の島々が舞台となった

誰もが知っている歴史的な出来事を背景に、

5つの物語(エピソード)が綴られています。

読んでみると、ふと歴史の舞台に舞い降りたような気持ちになるでしょう。

主人公はあなたです。さあ、長崎の島へ、旅に出ましょう。



長崎旅本 日本の歴史は長崎の海で動いた
平成23年発行
企画・発行=長崎県文化振興課
企画・デザイン・撮影=デザインスタジオ ヨンエフ
編集・執筆=企画編集スタジオ ノンブル
印刷=(株)藤木博英社

©tabinaga-uminomichi 2011

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載および複写を禁じます。

弥生時代
紀元3世紀
壱岐・原の辻

魏の使者が見た一支国

魏志倭人伝に記された島



時は弥生時代。
私たちは邪馬台国へ向かう途中、
海の王都「一支国」へ立ち寄った。

「大陸からの船だぞ〜」
「すごい！前に来た船よりも大きいぞ〜」
私たちを乗せた船は、一支国の内海湾に入った。小船に乗りかえて、幡鉾川をさかのぼっていくと、にわかには原の辻の人々がざわつきはじめた。
「今回はどんなものを運んできたのだろうか〜」
田んぼの作業もそこそこに放り投げ、わくわくと高揚した表情で川岸へ駆けよってくる。

船着き場に到着。今度は私たちが驚いた！石を積み重ねて造られた美しく巨大なコの字型の突堤が、私たちを出迎えてくれたのである。

「倭のどの国よりも立派な船着き場だ〜」
思わず感嘆の声をあげた。大陸と比べても最新設備で、その技術はすばらしく、手漕ぎの船が2〜3艇、停泊できる。人々もあたたかく、手馴れた様子で船を岸に

引きあげている。まさに海の王都とよぶにふさわしい玄関口だ。

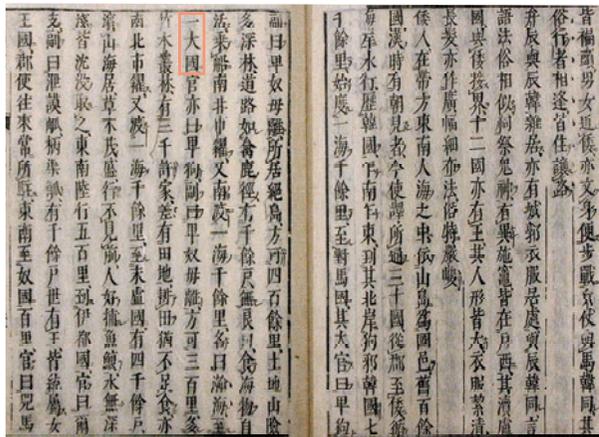
ここはただの島ではない。一島で一國とされた島国である。地理的に大陸からの文化の取り入れ口の島として重要視され、中央権力との関係が密接で、私たちのもてなし方も心得ている。美しい水田が広がり、多くの人々が農業にいそしんでおり、3千ばかりの家がある。倭人だけでなく、韓の国から渡ってきた人々も多く暮らしているようだ。

「おっ、これは何だ?!見たこともない代物だ!」
「さすが魏から運ばれてくるものはお宝がいっぱいだ!」

どうやら、船からおろした荷物の中から倭国ではまだお目にかかったことがないものが出てきたらしい。交易品の多くは、邪馬台国や奴国などに運ばれるが、一部はここの一支国にもおろされるのだ。
近づいてみると、その渦中にあるものは、機械仕掛けの弓(弩)に用いる矢の先端に



原の辻遺跡



魏志倭人伝に記された一支国(長崎県立長崎図書館蔵)

魏からの使者

朝鮮半島に存在した、魏の統治機関・帯方郡からやってきた使者。対馬国、一支国、末盧国、伊都国などを経て、邪馬台国をめざす。

東アジア最古の船着き場跡

原の辻遺跡の西側で発見された船着き場跡は、約2000年前のもの。東アジア最古の船着き場として注目を浴びています。調査終了後は埋め戻され、再び地中に眠っています。現地には目印の紅白標柱があります。原の辻ガイダンス前に展示されている模型を見ると、当時の様子が想像できます。



「一支国」と「一大国」

現在伝わる『三国志』の写本は、12世紀のもので、ここでは「一支国」が、「一大国」と表記されています。これは誤って記述されたものであると言われており、壱岐がこの一支国(一大国)にあたることは間違いありません。

1 魏志倭人伝

中国において、魏・呉・蜀が覇権を争った三国時代のことを記述した歴史書『三国志』。この中で、倭(当時の日本)について記された一説が「魏志倭人伝(魏書東夷伝倭人の条)」です。魏が治めていた朝鮮半島から邪馬台国に至るまでの国々のことが描かれています。

2 壱岐に渡った人々たち

今から約2千数百年前、多くの人々が壱岐に渡ってきました。彼らは低地に水田を開拓し、丘陵に住居や墓域をつくって、機能的な弥生都市を誕生させました。こうした朝鮮半島からの渡来人が弥生文化の担い手で、日本列島に広がっていききました。

卑弥呼へのおくりもの



壱岐にはモグラがない、 対馬にはタヌキがない。

長崎県参与 本馬貞夫

平戸の大殿様(ご隠居)松浦静山の「甲子夜話」に次のようなことが記されている。

わが平戸領の壱岐は、孤島ではあるが流石に一つの国であって産物も豊かである。しかるに国内には土竜がない。したがって田畑もその害を受けることはない。

私はいつも戯れのように言っている。かつて黄門水戸光圀公は、優れた蛤の稚貝を常陸国の磯浜、潮来の水郷地帯に放って多年繁殖し、領民がその利益を得ている。また、昆布は多く蝦夷松前で収穫されるが、昆布の種が付いた石を松前から取り寄せて、大津浜の海に置くようなことまでなされたという。これとは反対のことであるが、もし何者かが土竜を壱岐国に持ち込んだら、その子孫が繁殖して壱岐一国の非常な患いとなる。また虎を日本国内に放てば、これも日本にとって永く災いとなるはずである。このようなことをなした人は無間地獄に墮ちて、永遠にこの悪業の報いに苦しむであろうと笑ってきたが、また、これとは逆

対馬には狸がない。その訳



松浦静山(『三勇伝』の部分)
(松浦史料博物館蔵)

は昔年、対馬島主宗氏の家臣某が狸の害を絶とうと誓いを立て、生涯辛苦して、遂に対馬一国の狸の種の断絶に成功した。その人が常に「狸といってもこの世界に存する一種の動物だ。その種を断絶するというのは不善なることである。我が子孫は必ず絶えるであろう」と言っていたが、果たしてその子孫は現在絶えてしまったとか。
(「甲子夜話」正編 卷四十九より)

さすがに静山、自然のあり方について200年近くも前に警鐘を鳴らしている。生物学者の松尾公則氏によれば、現在確かにモグラは壱岐に棲息しておらず、タヌキも対馬にはいないそうだ。ただし対馬のタヌキの例は、元禄時代の陶山訥庵指揮によるイノシシ狩りと混同しているようだ。タヌキが対馬にいない

のは自然のままである。ちなみに陶山訥庵は農政家として著名な人物で、今日でも対馬聖人と讃えられている。

現代に目を向けてみよう。対馬には1頭の猪もいなかったはずであるが、17、8年前からイノシシが対馬下島で目撃されるようになり、今日では全島にわたって多大な農業被害が発生している。

持ち込まれた外来生物による被害といえば、壱岐・五島において台湾リスによる林業被害が拡大している。樹上で生活する台湾リスは木の葉や樹皮、新芽などを食い荒らすため、これまで5万匹以上を捕獲したが、なお被害は続いている。

長崎県各地域、特に離島部には豊かな自然がなお多く残っている。少なくとも、自然の摂理に反する行為・行動は慎まねばならない。それは自然のみならず人々の生活を破壊することにもつながっていく。

本馬貞夫(ほんまさだお)
1948年長崎市生まれ。山口大学文学部国史専攻卒。長崎県立高等学校教諭、長崎県立長崎図書館郷土課長、同副館長を経て、現在長崎県参与。著書に『貿易都市長崎の研究』など。

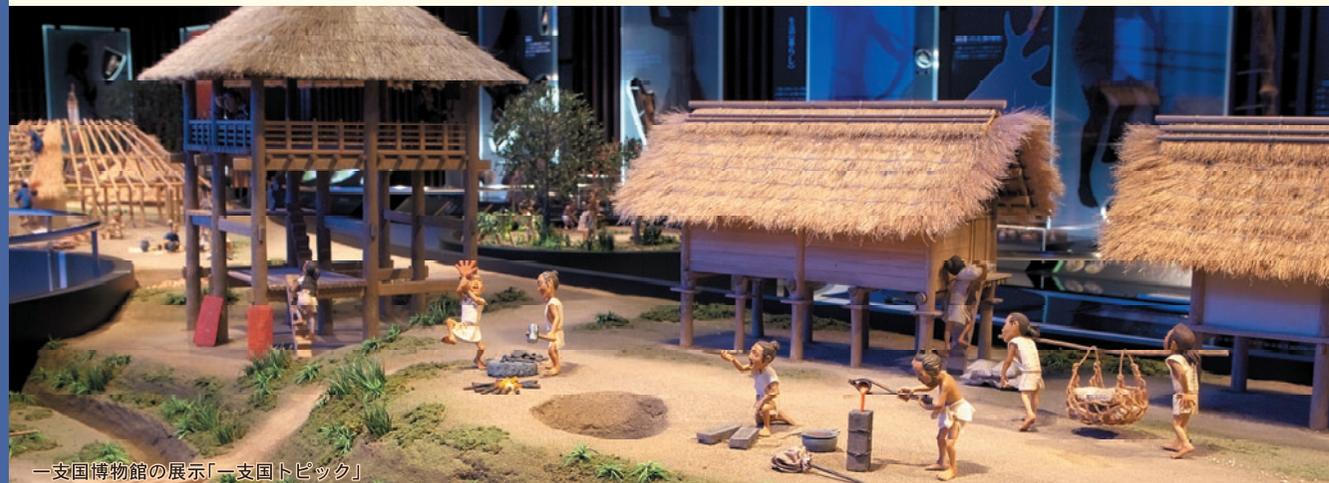
プラスナビ 元禄の猪狩りから300年が経過し、対馬には新たな生態系が定着していた。そこに再び猪を持ち込む行為は生態系を戻すことにはならない。



魏志倭人伝に記された一行は、対馬国、一支国(壱岐)を経て、末盧国(松浦地方)→伊都国(糸島半島)→邪馬台国へと至ります。魏志倭人伝には、このほかにもいくつかの国名が記されていますが、現在、その王都が特定できているのは一支国だけです。

③ 魏志倭人伝には、対馬国も登場
対馬については、「断崖絶壁で、山は深く険しい。道は獣道のように細い。水田がなく、海産物を食して自活し、朝鮮半島や日本列島と交易をして暮らしている」と記されています。

取り付けられた鎌(三翼鎌)であった。大陸で武器として使われていた筈は、倭国にはまだ伝わっていませんでしたが、三翼鎌が青銅でつくられていたため、珍しい品として持ってきたものだ。その近くでは、美しいトンボ玉に女性や子どもたちが集まっていた。
倭国にはまだない、さまざま新しいものをいち早く見ている一支国の人々は、つまり邪馬台国の女王・卑弥呼よりも先に、異国の文化にふれているのだ。隣の対馬国も同じである。
交易品の小さなものは、韓の国で製作された野焼きの土器に入れて運ぶ。その役割を終えた土器は、日常生活の中で煮炊き用の容器や食器として再利用されていた。単に物の行き来だけでなく、大陸の風土や文化までもがここには根付いているようだ。

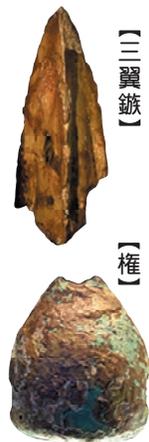


一支国博物館の展示「一支国トピック」



一支国博物館の ファイギュアは実在の人物

2010年、壱岐に、原の辻遺跡や古墳の歴史を学べる「一支国博物館」がオープンしました。中でも注目してほしいのが、弥生時代の原の辻の様子を再現した模型の中のファイギュア。壱岐市民をモデルにした顔があるのです。旅の途中で、見覚えのある人に出会うかもしれませんね。



原の辻遺跡から 発掘された品々

原の辻遺跡からは、「日本一」や「日本最古」「日本初」など、他にはない貴重なものがたくさん発掘されています。例えば、朝鮮半島系土器の出土数は日本一、日本最古の権(棒秤の鏝)、日本最古のトンボ玉、日本初のココヤシの笛などです。さながら「弥生時代のデパート」のようです。

奈良時代

760年頃

対馬・金田城

水平線に異国を望む、最果ての島。 城を守り、国を守り、 そして遠い故郷を思う。

防人たちの歌

万葉集に残る防人の想い



防人の若者

対馬の金田城近辺を警護する東国出身の防人。故郷に妻と小さな息子がいる。

こちら、この近所の子かい？むやみに山城に近づいてはいけないよ。え？私が誰かって？私は防人。この金田城を、そしてこの国を守る兵士だよ。

防人の仕事を知っているかい？海の方の異国が攻めてこないように、ここで見張っているのさ。もし異国の軍隊がやってきたら、私たちが打ち払うんだ。

なぜ見張ってないといけないかって？そうだな。君がまだ生まれる前のことかな。百年ほど前に、海の方の百済という国が、隣国の新羅と大國・唐の連合軍に滅ぼされたことを知っているかい？わが国の軍隊は、その百済から求められて救援に向かったのさ。しかし百済の白村江河口での決戦で、

① 白村江の戦い
663年、朝鮮半島の白村江河口で、日本軍は唐・新羅の連合軍と戦いましたが、軍船400隻を失う大敗となりました。



白村江の戦いと朝鮮式山城

唐と新羅に大敗してしまった。それ以来、国の偉い人たちは、唐と新羅がわが国までも襲うのではないかと不安になったらしい。そこで、ここ対馬に山城を築き、我々のような防人が配されることになったんだよ。でもまだ、一度も外国の軍隊が攻めて来たことはないんだ。だから普段は、兵士としての仕事だけでなく、農作業もしているのさ。

この金田城を君たち地元の人々は「かねたのき」とよんでいるようだね。浅茅湾の中にあつて、天然の絶壁を利用して、この城は、百済の人々の技術を用いた城らしいぞ。ほら山頂の周囲を見てごらん。石垣がめぐらされているだろう。この石垣は、非常に強固で実に立派なものなんだ。きつと何百年も、いや千年も先まで、そのまま残るだろうね。

私の故郷はどこかって？私も含め仲間の防人たちは、東国から来た者がほとんどだよ。食べ物や武器も自分で用意しなければならぬし、任期の間、租税が免除されるわけでもない。働き手がいなくなって、



金田城壁石垣(東南角石垣)跡と黒瀬湾



金田城の石垣

金田城は、百済の人々の技術を用いた朝鮮式山城。山頂周囲には、石垣(石垣)のかなりの部分が現在も残る、国の特別史跡です。地元では「黒瀬の城山」「金田城」ともよばれます。

金田城の石垣

防人の住居跡

金田城の「一ノ城戸」「二ノ城戸」「三ノ城戸」では、調査・整備が進んでいますが、「二ノ城戸」と「三ノ城戸」の中間地点の「ピングシ山」では、防人の住居跡が発見されています。



大吉戸神社

一ノ城戸の先には、大吉戸神社があります。山城の守護神として祀ったもので、のちには歴代対馬島主・宗家の尊崇も厚く、宗家が納めた神輿が安置されています。



防人歌じまん

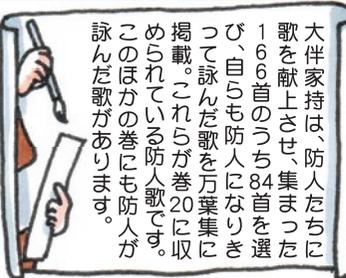


防人から歌を皆券集集したら、こんなに集まっちゃった！



己妻を人の里に甲直きおほほしく見つそ来ぬる、この道の間に

(万葉集巻14 3571)



大伴家持は、防人たちに歌を献上させ、集まった166首のうち84首を選び、自らも防人になりきって詠んだ歌を万葉集に掲載。これらが巻20に収められている防人歌です。このほかの巻にも防人が詠んだ歌があります。



コラム [海の道]

2

外交官「雨森芳洲」

長崎県参与 本馬貞夫



雨森芳洲
(滋賀県長浜市 芳洲会所有)

江戸時代には12度におよぶ朝鮮通信使が来日した。徳川政権下において、日本が対等な外交関係を結んだのは朝鮮国のみである。日朝の間であって外交交渉を委任され、通信使来日の際には、その江戸往復の警備など一切の業務を担ったのは対馬藩であった。

元禄2年(1689)、儒学の師匠・木下順庵の推挙で対馬藩に仕官した雨森芳洲[1668-1755]は、正徳・享保2度の朝鮮通信使来日の際、真文役として一行に同行し、朝鮮側との交渉や文書往復などの実務を担当した。

芳洲を有名にしたのは、正徳の通信使が将軍に呈する国書の日本国王号問題である。当時幕府の儒官であった新井白石は、将軍の称号を室町時代に復して「日本国王」とすべく朝鮮への交渉を対馬藩に命じた。これに対して芳洲は、「これまでの慣例で徳川将軍は「日本国大君」と称してきた。将軍が日本国王

を名乗れば名目上とはいえ日本の主権者である天皇の尊号を犯すことになる」と主張した。結局、このときの国書では「日本国王」号が使われたが、同門の後輩である芳洲を対馬の「なま学匠」と記す(『折たく柴の記』)など白石をいら立たせた。芳洲の正論は白石の胸にグサリと突き刺さったのである。

次に享保の通信使のときのエピソードをいくつか。芳洲はこのときの製述官・申維翰と、対馬藩主に対する製述官の礼の仕方で大げんかをし、このため藩主は申維翰に会わなかった。

また、芳洲が「倭国”倭人”は蔑称だから使わないでくれ」と申し入れたところ、逆に申維翰から「そちらも我々のことを“唐人”と言うではないか」と反論された。芳洲は「朝鮮人のことを尊ぶがゆえに中国人と同じく唐人というのである」と切り返した。

このように反目し合った道中だったが、厳原で別れるとき芳洲は涙を流して別れを惜しんだ。申維翰が「君の鉄心石腸をよく知っている。なぜ涙を流すのか」と言うと、「もう自分も年をとった。自分は対馬の鬼になる(骨を埋める)」と答えたという(申維翰『海游録』)。互いに主張することは主張し、競い合った二人の別離は印象的である。

今日では希代の外交官と評価される雨森芳洲。彼は外交の基本を「誠信の交わり」と定めている。「互いに欺かず、争わず、真実をもって交わる」(雨森芳洲『交隣提醒』)と。

プラスナビ 真文役・外交文書の解読や起草をおこなう役 製述官・日本側からの文化的接触に対応するために設けられ、特に漢詩文に秀でた人物があてられた。



『朝鮮国信使絵巻』(部分)(長崎県立対馬歴史民俗資料館蔵)

9

② 東国

東国とは現在でいう関東地方のことです。防人は、遠江(静岡県西部)以東の東国から徴兵されていた。

③ 万葉集

現存する最古の歌集『万葉集』には、防人たちが詠んだ歌も多く収められています。

④ 対馬の嶺は――

対馬の山には低い雲はかからない。上の嶺にたなびいている雲を見て、あなたを偲ぼう。

⑤ 我が面の――

もし私の顔が思い出せなくなったら、湧き上がる嶺の雲を見ながら、私を懐かしく想ってください。

残された家族は大変なんだ。任期は3年だけど、延びることもよくあるらしい。中には、無事に故郷に帰れないものもあるんだ。私もいつになったら帰れるんだろう。ああ、そうだ。東国の自宅には、君くらいの息子がいるんだ。妻や子は、元気でやっているだろうか。会いたいなあ。

そうそう、寂しさや辛さを紛らわすために、歌を詠む仲間も多いんだよ。え？歌なんて都の貴族が詠むものだと思ってた？いやいや私たちだって歌を詠むことはできるさ。どんな歌かって？私のは下手だからとても聞かせられないよ。かわりに友人の歌を教えてあげよう。

③ (万葉集 卷十四 三五一六)
対馬の嶺は 下雲あらなふ 可牟の嶺に たなびく雲を 見つつ偲はも

これは彼が大切な女性からもらった「我が面の忘れむしだは国溢り嶺に立つ雲を見つつ偲はせ(万葉集 卷十四 三五一五)」という歌への返事なんだよ。ちよつと難しいかな？愛する女性を思う気持ち、とつても上手に表現されているんだ。この歌も、金田城の石垣と同じように、きつとこれから先もずっと、残っていくんじゃないかな。なんとなく、そんな気がするんだ。



城山山頂から見る浅茅湾

防人も見たであろう 浅茅湾の水平線

金田城は、対馬の中央に広がる浅茅湾に突き出した城山に位置しているため、石垣だけではなく、天然の断崖にも守られています。断崖上を横切る登山道では黒瀬湾を眺望でき、城山山頂からは浅茅湾を一望できます。

近代も「国防の最前線」

城山は明治後期に要塞工事が始まり、「国防の最前線」となりました。日露戦争時には軍の施設や砲台が整備され、その跡は今でも目にすることができます。



軍事施設跡



砲台跡

8

大陸をめざす遣唐使の風待ちの島

遣唐使にとって、日本最後の地となる五島。ここで我々は、大陸へと吹く風を待っていた。

我々遣唐使の船団は、ようやく五島列島へ集結した。

私は、遣唐使船の水夫。海に慣れていてということだけで徴用され、地元の仲間たちと一緒に船上での仕事にいらして編成、総数500名ほどにもなる大船団であるが、これは「4艘も送れば、どれかが帰って来るだろう」という考えだとか。このことから、この航海の危険性がわかっていただけだろう。

この延暦の遣唐使の大使は藤原葛麻呂様、副使は石川道益様、さらに判官様が4名、また留学生や学問僧の方々も多数乗船しておられる。その中には、将来の日本仏教を背負って立つと噂される空海様、最澄様もおられると聞いた。危険な航海を前に心の中いかにばかりか。私も果たして無事に家族のもとに帰ることができるのか。日本最後の寄港地となる五島へ向かう船上で、私は不安にさいなまれていた。これには、命がけの船旅の危険性に加え、「五島列島は地の果て」という私自身の印象も大きく働いていた。

しかし実際に訪れてみた五島は、とても賑やかな海の交易拠点だった。多様な品物を積んだ船が港に並び、多くの船が縦横に帆走している。しおれかけていた私の気持ちは一転、まだ見ぬ異国への大きな期待と好奇心に打ち震えた。

① 遣唐使

630年に始まった遣唐使は、当初は香岐・対馬を経由し、朝鮮半島に沿って唐に入っていました。しかし、663年の「白村江の戦い」のち、新羅との関係が悪化すると、南西諸島を経て東シナ海を渡るルートに変更。8世紀後半からは、五島から直接、東シナ海を旅する航路となりました。

② 万葉集に詠まれた四つの船

「四つの船」は遣唐使船の別称で、万葉集にも詠まれています。

万葉集 卷十九 四二六五
四つの船 はや帰り来と
しらかかけ 朕が裳の裾に
齋ひて待たむ

入唐使・藤原清河らに賜った孝謙天皇の御歌で、「私も裳のすそに、麻や楮を白髪のようにして、齋戒して無事の帰国を待とう」という、切なる思いを詠んでいます。

これからしばらく一行は、この島で風を待つことになる。風が吹けば帆に風を受けての航海となるが、無風であれば我々水夫が櫓を漕いで進むことになろう。しかし強い逆風が吹いたり海が荒れ模様となったら、もうお手上げだ。その時には神仏に祈るしかない。

さて、風向きが変わったら、いよいよ日本を離れて大陸をめざすことになる。五島列島から大陸までは、約700km。運が良ければ一月ほどで渡れるらしいが、いったい何艘が無事に辿り着けるだろうか。



下五島：空海の像と辞本涯の碑 25頁③



上五島：観音岳より青方港を望む

フェリー「太古」

現在、博多―五島間を航行するフェリー「太古」のルートは、博多を出港して長崎県北部を航行し、平戸島の沖合いから宇久島、小値賀島を通過して上五島・下五島へと向かいます。これは、大宝2年(702)以降の遣唐使の航路の一部にあたります。



遣唐使ゆかりの中通島

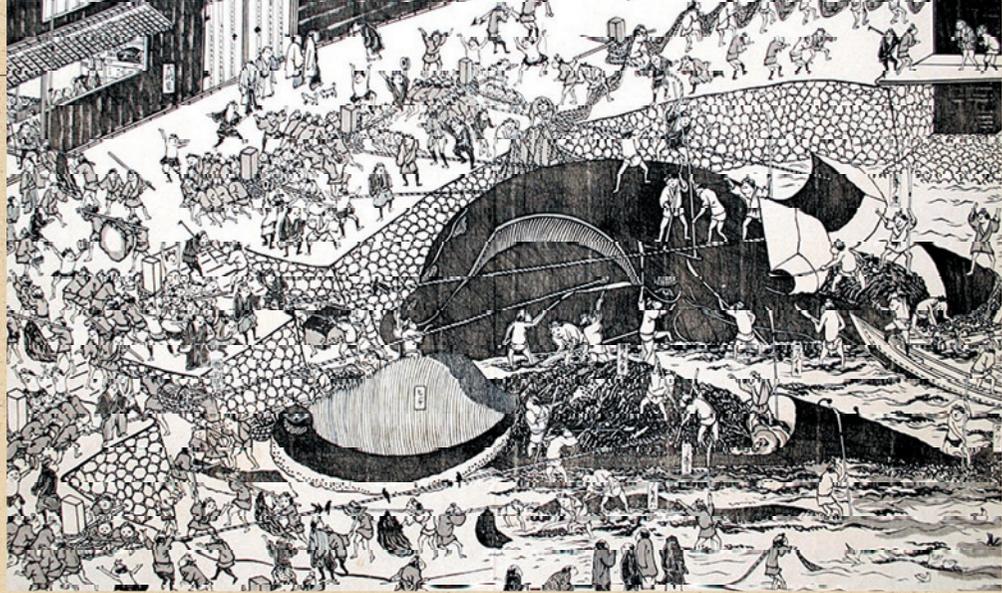
青方港入口の「岩家観音」姫神社跡、三日ノ浦の「御船様」、道土井の「弘法井戸」、山王山の「山王神社」など、中通島には遣唐使の一行が旅の安全祈願や、無事の帰国を感謝したゆかりの地が数多くあります。



姫神社跡

空海、五島にて



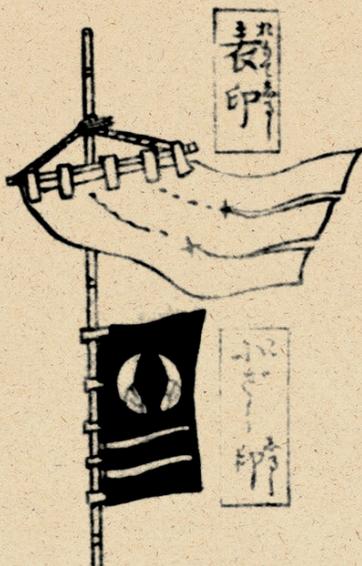


コラム「海の道」

3

牛のマークの鯨組

を手中に収め、日本一の鯨組にまで発展していきます。鯨1頭捕れると7つの浦が潤うと言っていた時代に、生月では年間200頭ほどの鯨を捕獲し、3000人も漁師や納屋働きの人々で活気にあふれていたといいますから、言い伝えが本当なら、自殺を思いとどませた牛さまさまってところでしょうか。



平戸市生月を車で走っていると「牛に注意」という看板に遭遇します。放牧場が多い生月では、車道を堂々と歩く牛が名物にもなっています。

牛と言えば、江戸時代に生月島を本拠地として鯨を捕っていた益富組の旗印は、丸に牛の角が入っています。鯨組なのに、なぜ牛の角なの？と首をかしげてしまいますが、こんな言い伝えがあります。益富組の初代、益富又左衛門は、最初はなかなか経営がうまくいかず、首つりの場所を求めて山をさまよっていたところ、1頭の牛が前方に立ちふさがり、その牛を見て自殺を思いとどまったのです。その後、又左衛門は心機一転。益富組は、当時日本で最も鯨が多かった壱岐の漁場

長崎県には、生月だけでなく、壱岐や平戸、五島などにも捕鯨基地があり、壱岐には鯨組の漁師が大漁祈願をおこなっていたという鯨岩、五島の有川には鯨を供養した神社など、各地に鯨まつわる史跡も残ります。捕鯨が盛んだった歴史から、今でも長崎県の鯨の消費量は日本一。大きな福がくるようにとの縁起担ぎで、正月や祝い事には鯨料理は欠かせません。また長崎県(特に平戸・松浦地方)で一番メジャーな粕漬は、鯨の軟骨の粕漬。コリコリという歯ごたえがたまらない珍味です。

ところで皆さん、鯨はなぜ、魚偏に京と書くか知っていますか？「京」とは、億、兆、京とつながる大きな数の単位。もう、とてつもなく大きい魚…、そんな昔の人の思いが伝わってきますね。



『蒙古襲来絵詞』(部分)(九州大学附属図書館蔵)

「元船が沈没していくぞ！」
「見ろ！船が木の葉のように揺れている」
海上に目をやると、元の軍人たちが、船にしがみついているのが見える。どうやら彼らは、このあたりの台風慣れしていないらしい。
「元船が沈没していくぞ！」
次々に、元の船が海に飲み込まれていく。「神風だ。神が我々に味方して風を吹かせたんだ」
誰かがそう言った。沈没をまぬがれた元の船は、その多くが本国へと逃げていく。一部はこの鷹島に上陸してきたが、戦意を失くした元軍の掃討は容易だった。我々は競って手柄をたてた。

「天気が悪化してきたぞ」
仲間の言葉で、私は空想を止めた。確かに空はいつそう暗くなり、パラパラと雨が降り出した。やがてものすごい風が吹き出し、夜にはすっかり暴風雨になってしまった。
「見ろ！船が木の葉のように揺れている」
海上に目をやると、元の軍人たちが、船にしがみついているのが見える。どうやら彼らは、このあたりの台風慣れしていないらしい。
「元船が沈没していくぞ！」
次々に、元の船が海に飲み込まれていく。「神風だ。神が我々に味方して風を吹かせたんだ」
誰かがそう言った。沈没をまぬがれた元の船は、その多くが本国へと逃げていく。一部はこの鷹島に上陸してきたが、戦意を失くした元軍の掃討は容易だった。我々は競って手柄をたてた。



鷹島モンゴル村から見た海



元の船の隔壁板
元寇のときに沈んだ船の残骸が引きあげられ、鷹島埋蔵文化財センターに保存展示されています。



上：鷹島の神崎海岸で発見された青銅製の印鑑「管軍総印」。下：元軍が使用したといわれる武器「つぼう」。

■松浦市立鷹島歴史民俗資料館
松浦市立鷹島埋蔵文化財センター
☎0955-48-2744

海に沈んだ元軍の船

鷹島の開田地区では、鶏が鳴いたせいで隠れていた家族7人が元軍に見つかり、惨殺されたと伝わっています。この地域では、今日に至るまで鶏を飼わないそうです。



開田の七人塚
(松浦市鷹島町)

鷹島・開田の七人塚

フィランダのオランダ商館

ヨーロッパに最初に開かれた港

故郷のオランダにいる妻よ、元気にしているだろうか？使いたる慣れた商館とも、今日でお別れだ。カロン商館長にお供して挨拶回りも済ませ、荷造りも残り少し。あとは、明日の出島への出発を待つばかりとなっている。そういえばこれまでの手紙では、町の様子を詳しく知らせていなかったね。この町で書く最後の手紙だから、記念に町のことを書くことにしよう。

今日まで私が暮らしてきた町の名前は、フィランド。地元の人々は「平戸」とよんでいるようだ。小さな島の港町なのだが、私が勤務するオランダ商館のほか、一時はイギリスの商館が建っていたこともあり、この30年ほど国際貿易港としておおいに賑わっているのだよ。

最初に欧州の船が平戸の港に入港したのは、今から90年ほど前、ポルトガルの船だったそう。当初はこの地の領主松浦氏も歓迎して、南蛮貿易がおこなわれたが、取引をめぐって殺傷事件が起こり、彼らは横瀬浦という場所に貿易拠点を移したらしい。



平戸オランダ商館長の秘書

平戸オランダ商館に勤務し、商館長と行動をともにしている。故郷のオランダに愛する妻を残しての単身赴任。明日長崎に発つので、荷造り作業に追われている。



平戸オランダ商館図
モンタヌス著「オランダ東インド会社遣日使節紀行」(平戸市教育委員会蔵)

平戸和蘭商館跡

1987年から国史跡「平戸和蘭商館跡」の発掘調査がおこなわれ、当時のものと思われる遺構や遺物が出土しました。



かつて南蛮貿易で栄えた、異国情緒溢れる港町平戸は、「フィランド」とよばれた。

①南蛮貿易

ポルトガル船が初めて平戸に入港したのは1550年のこと。スペイン人は1584年に平戸に来航しました。当時の日本ではポルトガル人やスペイン人を南蛮人と呼び、南蛮貿易はキリスト教宣教師の布教活動と一体化しておこなわれました。

②宮の前事件

1561年、商取引をめぐって、平戸でポルトガル人と日本人の殺傷事件が発生。関係が悪化し、翌年には南蛮貿易の拠点は横瀬浦(現・西海市)に移されました。

③朱印状

1609年、オランダ船が平戸に入港。幕府は朱印状を与え、貿易を許可しました。

その後、江戸に現在の幕府が成立し、これまでのように、日本との貿易は自由におこなうことができなくなってしまった。しかしそんな中、我々オランダは幕府から特別な許可である朱印状を得て、1609年に入港し、この国では初となる商館を、ここ平戸に置いたんだよ。

その4年後には、イギリス船も平戸にやってきた。彼らは、中国の貿易商人の屋敷を借りて商館にしていたが、我々オランダ東インド会社との競争に敗れ、わずか10年ほどで閉鎖してしまっただろう。

短期間でいなくなってしまうイギリス人たちと異なり、我々オランダ人は平戸を拠点に、30年以上にもわたって輸出入の仕事に励み続けた。海に面した商館のすぐ前には埠頭があり、ここから東アジア各国の港に漕ぎ出しているのだよ。そうそう、この埠頭の雁木(階段)。私たちににとっては普通の高さだが、小柄な日本人たちにとってはちよつと高いらしい。

商館は当初は土蔵がついた借家だったが、



復元された平戸オランダ商館倉庫

平戸オランダ商館倉庫

オランダの東インド会社が築造した日本で初めての洋風建築物で、1639年に建てられました。しかし、キリスト教に由来する西暦「1639」が掲げられていたことなどから江戸幕府が翌年、破壊を命じた。文献や発掘成果をもとに復元され、2011年9月にオープン。復元工事着工の際には、当時の商館長の日記にならひ、最初の石が南西の隅に据えられました。

石積みのおランダ塀

1618年、商館の増築工事とともにつくられたオランダ塀。商館の目隠しと、火事などの延焼から守るために設置されました。高さ約2メートルの漆喰で固められた石の壁は、当時の面影を残す貴重な遺構です。



オランダ商館の悲劇





旧五輪教会堂(五島市)

コラム[海の道]

4

海の道は祈りの道

五島列島・久賀島の東岸にある海辺の小さな集落・五輪地区は、禁教時代に潜伏キリシタンが隠れ住んだ地です。そこに建つ古い日本家屋のような外観の旧五輪教会堂。1881年(明治14)に同じ久賀島の浜脇教会として完成しましたが、建て替えの際に五輪地区の信者たちが譲り受け、この地に移築。その後、老朽化が進み、隣に新しい教会堂が建ちますが、建物の歴史的・文化的価値を評価する声によって、保存が決定。現在、国の重要文化財に指定されています。

長崎県内には日本のカトリック教会数の約13%にあたる教会がありますが、このように海に近い場所に建つ教会堂が多いことに気づきます。教会堂から海を眺めていると、そこにはキリシタンの歴史を物語る海の道が見えてくるような気がします。

約500年前、鹿児島に上陸した宣教師ザビエルは、翌年、長崎県の平戸島を訪れます。平戸の領主・松浦氏は、貿易の利を目的に布教を許可。以降、南蛮貿易とセットで大村、島原、五島、長崎など各地で布教がおこなわれました。キリスト教は、海の道を通して伝わり、広まっていったのです。

やがて禁教時代に入ると、厳しい弾圧や食料難などに耐えかねたキリシタンたちは、安住の地を求めて外海(現・長崎市)などから五島列島をめざし、約3000人が小さな手漕ぎの舟で100キロ以上の海の道を渡っていきました。しかし、五島では、便利で肥えた土地にはすでに人が住み、キリシタンたちは瘦せた狭い不便な土地に住むことしかできませんでした。明治になってからの迫害もありましたが、その後キリスト教が解

禁されると、信者たちは自由になった喜びの証^{あかし}として、それぞれの地に教会堂を建てはじめます。また、神父がミサのために舟で巡回する姿は、250年以上にも及ぶ苦難の禁教時代に終わりを告げた象徴のようでもありました。

いま、海辺に建つ多くの教会は、かつて祈りの玄関口が海であったことをうかがわせる、長崎県ならではの風景であり、教会が建っている場所そのものがキリシタンたちの歩みを物語っているといえるでしょう。教会で祈りを捧げる信者たちの姿に、綿々と受け継がれてきた厚い信仰の歴史を感じることが出来ます。十字架を通った海の道を思いながら、長崎県内の教会をめぐる心の旅もいいかもしれません。

✦ **プラスナビ** 「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、国の世界遺産暫定リストに掲載されており、世界遺産登録をめざしています。



『長崎港之図』(部分) 円山応挙(長崎歴史文化博物館蔵)

4 平戸イギリス商館
1613年、オランダに次いでイギリス船も交易を求めて平戸にやってきました。中国の貿易商人・李旦の屋敷を借りて商館にしたとされています。

5 長崎の出島

幕府の命によって長崎の有力商人が築造した人工島。1636年、ポルトガル人を収容しましたが、1639年には来航を禁止して国外追放。1641年にオランダ商館を平戸から移し、開国までの200年余りの間、唯一西洋との窓口となりました。

取引量が増えていくにつれて、施設が手狭になってきた。そこで2年前に、壁は石材、屋根には日本の瓦を用いた、大型の石造りの倉庫を建築した。もちろん建設工事着工の際には、最初の石を南西の隅に据えた。そう、オランダの伝統的な竣工式、エールステ・STEIN・レヒンダ。オランダから遠く離れたこの地でも、故郷の伝統を忘れないようにと、商館長が執りおこなったんだ。

しかし、立派な倉庫を建てたばかりだというのに、昨年、商館の取り壊しを命じられてしまった。そしてとうとう明日をもって、長崎の出島へと移転することになったのだ。これからこの国では、貿易港を長崎だけに限るらしい。住み慣れたフィランドを離れるのは少々寂しいが、仕方がないことだね。

おや、塀の上から猫が覗いている。外から見えないように、商館全体に2メートルもの高さの塀をめぐらせているというのに。どうやら隣の海産物屋で商^{あきな}っている干物を狙っているようだ。

さて、荷造りももう少し残っているから、手紙はこの辺にしておこう。ちよつと荷物が多すぎるから、皿やパイプなど、いくつかの商品はそのまま置いていこうと商館長と相談しているところなんだ。古い錨も、港に沈めていくことにしようと思っている。いつか平戸の人たちが、これらを見つけて、私たちのことを思い出してくれるかもしれないね。

それでは、平戸オランダ商館より。愛をこめて。



オランダ埠頭から平戸城を望む



オランダ埠頭



1952年、川内の港から鉄製の錨が引きあげられました。現在、平戸市役所前に展示されています。これより170年前にも似たものが引きあげられており(松浦史料博物館に展示)、これらは17世紀のオランダ船のものとして伝えられています。

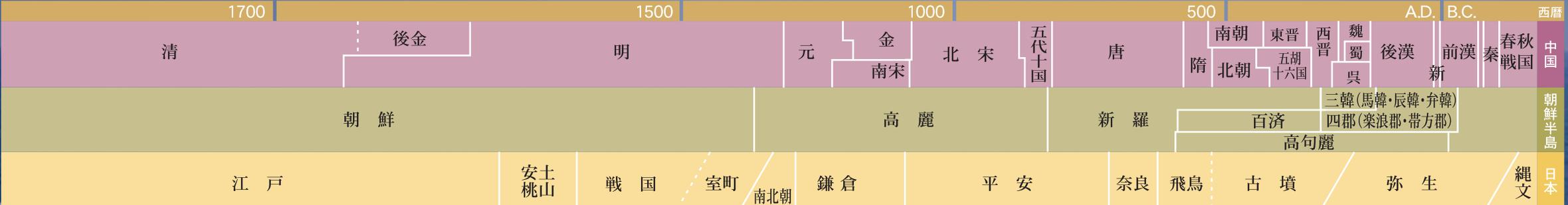
オランダ船の錨

オランダ人たちが船から荷揚げする際に使ったとされる埠頭の跡が残っています。平戸オランダ商館の敷地の前にあり、ここが輸入や輸出の玄関口でした。

オランダ埠頭

歴史は長崎の海で動いた

その昔、時代の流れをいち早く感じていたのは、長崎県の海に浮かぶ島々だった



長崎の島を舞台にした主な出来事

日本の主な出来事

世界の主な出来事

前2000年
「**杵岐「原の辻」に集落ができる**」



episode 1



前221年 秦の始皇帝が中国統一

57 倭の奴国王が後漢に使いを送る



239 邪馬台国の卑弥呼が魏に使いを送る
このころ 中国で「魏志倭人伝」が書かれる

5世紀 ヤマト政権の古墳築造全盛期

607 小野妹子を隋に送る

630 第1回遣唐使を送る

645 大化の改新

このころ「万葉集」編集される

589 隋が中国を統一

618 唐が中国を統一

663 朝鮮半島で白村江の戦い

676 新羅が朝鮮半島を統一

500

664 対馬・杵岐・九州北部に防人の配備が始まる

episode 2



804 遣唐使船に乗った空海が五島を出航

episode 3



1192 源頼朝が征夷大将軍となる

1206 チンギス・ハンがモンゴル統一

1268 モンゴルの使者が国書をもたらし

1271 フビライ・ハンが国号を元と定める

1338 足利尊氏が征夷大将軍となる

1404 日明貿易(勘合貿易)始まる

1467 応仁の乱(77)

1492 コロンブスがアメリカに到着

1498 ヴァスコ・ダ・ガマが海路、インド到達

1517 ルターが宗教改革を始める

1519 マゼランが世界周航に出発(22)

1581 オランダがスペインから独立

1543 ポルトガル人が鉄砲を伝える

1549 ザビエルがキリスト教を伝える

1590 豊臣秀吉が天下統一

1592 文禄・慶長の役(98)

1600 関ヶ原の戦い

1603 徳川家康が征夷大将軍となる

1612 幕府領でキリスト教を禁止

その後全国に及ぶ

1616 ヌルハチが後金を建国

1619 オランダがジャバに進出

1636 後金を清と改称

1640 イギリスの清教徒革命(60)

1661 フランスのルイ14世の絶対王政(15)

1688 イギリスの名誉革命(89)

1637 島原の乱(38)

1639 ポルトガル船の来航禁止

1641 鎖国の体制が固まる

1709 幕府が新井白石を登用

1715 近松門左衛門の人形浄瑠璃「国姓爺合戦」

1775 アメリカの独立戦争(83)

1776 アメリカ独立宣言

1789 フランス革命

1804 ナポレオンがフランスの皇帝となる

1840 アヘン戦争(42)

1700

1000

0

1607 江戸時代最初の朝鮮通信使が来日
1609 平戸にオランダ商館ができる
1624 鄭成功、平戸に生まれる

episode 5



1550 倭寇の活動が再び活発になる
フランシスコ・ザビエルが平戸を訪れる

episode 4



「松浦党」が台頭

episode 3



episode 2



episode 1



1725 鯨組「益富組」が生月で創業

コラム「海の道」**2** P9



1821 松浦静山が「甲子夜話」を書き始める

コラム「海の道」**1** P4



さあ、歴史の舞台となった長崎県の島々を旅しよう。

■主な交通アクセスのめやす

対馬へ



船の旅だと福岡からジェットフォイルがフェリーに乗り、玄界灘を渡ります。福岡空港か長崎空港から飛行機に乗るとあっという間に到着です。

- 【ジェットフォイル】博多港→厳原港 2時間15分／九州郵船
- 【フェリー】博多港→厳原港 4時間35分／九州郵船
福岡-那の津港→厳原港 4時間30分／壱岐対馬フェリー
- 【飛行機】福岡空港→対馬やまねこ空港 25分／ANA
長崎空港→対馬やまねこ空港 35分／ORC

壱岐へ



福岡から出る対馬行きのジェットフォイルやフェリーが壱岐を経由します。佐賀県唐津からのフェリーもあります。飛行機だと長崎空港からわずか30分です。壱岐と対馬はジェットフォイルで65分、2島めぐりを楽しんで！

- 【ジェットフォイル】博多港→郷ノ浦港 1時間10分／九州郵船
博多港→芦辺港 1時間5分／九州郵船
- 【フェリー】博多港→郷ノ浦港 2時間20分／九州郵船
博多港→芦辺港 2時間10分／九州郵船
福岡-那の津港→芦辺港 2時間15分／壱岐対馬フェリー
唐津東港→印通寺港 1時間40分／九州郵船
- 【飛行機】長崎空港→壱岐空港 30分／ORC

五島列島へ



海からのアクセスは長崎港や佐世保港を出発する船便があります。深夜に博多港を出港して翌朝に到着するフェリー-太古もおすすめ。下五島へは福岡空港や長崎空港からの飛行機もあります。夏には大阪空港から直行便も。

- 【ジェットフォイル】長崎港→奈良尾港 1時間15分／九州商船
- 【高速船】長崎港→鯛ノ浦港 1時間40分／五島産業汽船
佐世保港→有川港 1時間25分／九州商船、五島産業汽船、美咲海送
- 【フェリー】博多港→青方港 6時間30分／野母商船(フェリー太古)
博多港→若松港 7時間40分／野母商船(フェリー太古)
長崎港→奈良尾港 2時間45分／九州商船
佐世保港→有川港 2時間40分／九州商船、美咲海送
- 【ジェットフォイル】長崎港→福江港 1時間25分／九州商船
- 【フェリー】博多港→福江港 9時間30分／野母商船(フェリー太古)
長崎港→福江港 3時間25分／九州商船
- 【飛行機】福岡空港→福江空港 40分／ANA
長崎空港→福江空港 30分／ORC
大阪空港→福江空港 1時間15分／ANA *夏のみ運行

平戸島・生月島・鷹島へ



現在は九州本土と橋でつながっているので、車などで気軽に行くことができます。船が苦手な人も島の旅を楽しめます。橋の通行料はいずれも無料。

- 【車】長崎自動車道(武雄JCT)→西九州自動車道(相浦中里IC)→国道204号→平戸大橋→平戸島(平戸市)、国道383号・県道19号→生月大橋→生月島(平戸市)
- 【車】佐賀県伊万里方面から→国道204号→鷹島肥前大橋→鷹島(松浦市)
佐賀県唐津方面から→切木線→鷹島肥前大橋→鷹島(松浦市)
※鷹島へは長崎県松浦市の今福港や御厨港からのフェリーもあります。

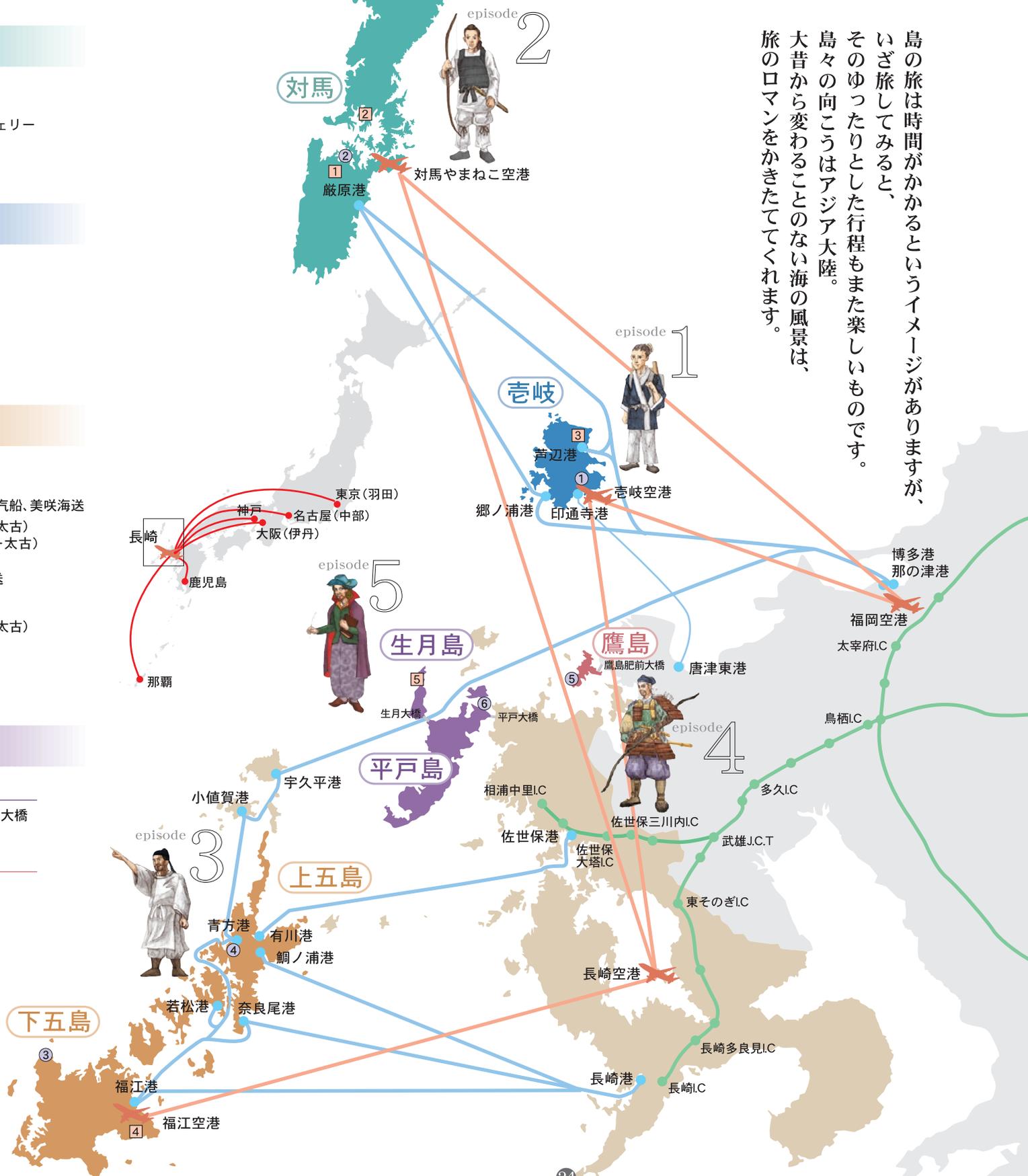
お問い合わせ先

交通アクセス

- 九州郵船…………… ☎092-281-0831
- 壱岐対馬フェリー… ☎092-725-1162
- 九州商船…………… ☎095-822-9153
- 五島産業汽船………… ☎0959-42-3447
- 美咲海送…………… ☎0956-42-5607
- 野母商船…………… ☎092-291-0510
- ANA(全日空) …… ☎0570-029-222
- ORC(オリエンタルエアブリッジ)… ☎0570-064-380

観光に関する窓口

- 対馬物産観光協会………… ☎0920-52-1566
- 壱岐市観光協会………… ☎0920-47-3700
- 新上五島町観光物産協会… ☎0959-42-0964
- 五島市観光協会………… ☎0959-72-2963
- 平戸観光交流センター… ☎0950-22-3060
- 松浦市観光物産課………… ☎0956-72-1111(代)



島の旅は時間がかかるというイメージがありますが、いざ旅してみると、そのゆったりとした行程もまた楽しいものです。島々の向こうはアジア大陸。大昔から変わることはない海の風景は、旅のロマンをかきたててくれます。

もうひとつのエピソード (おまけ)



思わず旅したくなる歴史ガイドブック
長崎県企画「ながさき歴史発見・発信プロジェクト」

旅する長崎学

「海の道編」

各号600円(税込)
A5判/64ページ/オールカラー



第11号 壱岐
海上の王国 旅人の交差点



第12号 対馬
海神の島 大陸交流のかけ橋



第13号 五島列島
海神の島 大陸交流のかけ橋
癒しの島々をめぐる



第14号 平戸・松浦
西海に生きた武士と国際交流の足跡



第15号 島ガイド
長崎県は日本一の島王国 971の島めぐり

ご購入方法

- お近くの書店でご注文 (取り寄せになる場合は、多少お時間がかかります)
- 出版社からご購入(送料・代金の振込手数料はお客様負担)
- 長崎文献社 TEL095-823-5247 FAX095-823-5252
- インターネットでご購入(大手書店、または長崎文献社のネットショッピングをご利用ください)

お問い合わせ

- 「ながさき歴史発見・発信プロジェクト」について
長崎県文化振興課 TEL095-895-2762
- 「旅する長崎学」について
長崎文献社 TEL095-823-5247

ネットで学ぶ長崎学もチェック!

長崎県の歴史と旅の遊学サイト「たびなが」
詳しくはWEBで

たびなが 検索

旅する長崎学 <http://tabinaga.jp>

